

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K12507

研究課題名（和文）アディクション問題にかかわる看護職者支援モデルに基づく支援プログラムの開発

研究課題名（英文）THE SUPPORT PROGRAM FOR NURSES WORKING IN THE FIELD OF ADDICTION

研究代表者

寶田 穂 (TAKARADA, Minori)

武庫川女子大学・看護学部・教授

研究者番号：00321133

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：アディクション看護において、看護職者は、共感疲労や二次的外傷性ストレスに陥り、怒りや無力感、孤立感といった苦しい感情を抱きやすい。看護職者への支援は不可欠であり、これまでに、「アディクション問題にかかわる看護職者支援モデル」を作成した。今回は、支援モデルに基づき支援プログラムを作成・実践し、参加者への質問紙やインタビュー調査を行い、評価した。その結果、プログラムの効果が認められ、アディクション看護においては、個人の価値観の重要性が示唆された。価値観の揺れは、看護職者にとって困難な体験であり、支援においては、価値観の揺れとどう向き合い、そのプロセスをどう支えるかが重要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アディクション問題へのかかわりにストレスを感じている看護職者は少なくない。しかし、そういった看護職者への支援に焦点を当てた研究は、見いだせなかった。本研究によって、看護職者への実践的な支援プログラムが開発されることで、看護職者以外にも、アディクション問題にかかわることの多い人々への支援研究へと学際的な発展が期待される。本研究結果の直接的な意義としては、支援プログラムが開発されることにより、看護職者支援の一方法を示すことができ、支援プログラム実践によって、看護職者のストレスの軽減・精神的成長につながり、依存症者の回復支援やアディクション問題への取り組みの促進につながる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：In addiction nursing, nurses can easily suffer from compassion fatigue and secondary traumatic stress, which can lead to distressing feelings of anger, powerlessness, and isolation. Support for nurses is essential, and we have developed a “Support Model for nurses working in the field of addiction”. In this study, we developed and practiced a support program based on the model and evaluated the program through questionnaires and interviews with participants. The results showed that the program was effective, suggesting the importance of individual values in addiction nursing. Wavering and changing values were difficult experiences for nurses. In support, it was considered important how to face the wavering of values and how to support the process.

研究分野：精神看護学

キーワード：アディクション 看護職者 支援プログラム 感情 価値観

1. 研究開始当初の背景

現在の日本において、アディクションに関連する問題（以下、アディクション問題）は、大きな社会問題である。厚生労働省は、依存症の治療を行う医療機関が少ないことや、治療を行っている医療機関の情報が乏しいこと、効果的な治療法が確立していないことなどの理由から、具体的な対応策の検討が喫緊の課題とし、相談や連携体制の整備、依存症回復のための体系的なプログラムの普及などをすすめている（厚生労働省、依存症者に対する医療及びその回復支援に関する検討会報告書、平成25年3月28日）。

アディクション問題をかかえた人（以下、依存症者）は、様々な健康上の問題で保健医療の対象となっており、薬物やアルコールのアディクションは、心血管障害、脳卒中、がん、HIV/AIDS、B型やC型肝炎、肺疾患等、様々な合併症を併発する（NIH, 2014）。また、小児や高齢者の虐待、DVなどの背景にアディクション問題が潜んでいることも多い。救急医療の場においても、危険ドラッグ、覚せい剤、アルコールなどの乱用の中毒症状や事故で搬送される患者は少なくない。看護においては、対象者が依存症と診断されているにもかかわらず、様々なアディクション問題への取り組みは重要な課題である。

しかし、看護職者は、依存症者とのかかわりでネガティブな苦しい感情を抱きやすく、その感情が患者とのかかわりを妨げる傾向にある（寶田、2009）。依存症者には、心的外傷をもつ人が多く（Jacobsoen, 2001）、心的外傷をもつ人への援助においては、援助者もバーンアウトや二次的外傷性ストレス状態に陥りやすくなる（Stamm, 2003）。看護職者のネガティブな感情も、看護職者のストレスやバーンアウトと関連していると考えられる（寶田、2010、2009）。アディクション問題にかかわる看護職者が、患者の健康回復に向けて前向きに取り組むには、看護職者のストレスやバーンアウトに対する支援が必要となる（寶田、2015、2013a、2012b、2009）。

これまでの研究（2013年度～2015年度科研、基盤研究C、JP25463571）にて、アディクション問題にかかわる看護職者への支援モデルを作成した。アディクション問題にかかわる看護職者のネガティブな感情のニュートラル（中立的）な感情への変化は、価値や態度・行動の変化と関連し、その変化は、自らの看護実践の結果として患者の回復への変化をつかむことによってもたらされていた。患者の変化をつかむためには、依存症者やアディクション問題への理解力や感情力といった能力の向上が必要であり、能力の向上には、当事者や熟練専門職者からの体験に基づく情報や知識の提供と看護職者が安心して語ることのできる場の提供が支援として必要と考えられた。

そこで今回は、支援モデルに基づき、上記の支援が可能となる支援プログラムを作成・実践し、実践内容及び質問紙とインタビュー調査をもとに、支援プログラムを評価・検証した上で、支援モデルを構築し、「アディクション問題にかかわる看護職者支援プログラム」の開発をめざす。

2. 研究の目的

- (1) 目的1（プログラムの評価1）：支援プログラムを実施し、実施内容の記録とプログラム参加者に質問紙調査を行い、支援プログラムの実施期間中の効果（影響）を明らかにする。
- (2) 目的2（プログラムの評価2）：支援プログラム終了から数ヶ月～1年後に、プログラム参加者へ複数回の質的インタビュー調査を行い、支援プログラム終了後の看護実践への持続的な効果（影響）を明らかにする。
- (3) 目的3：目的1・目的2を明らかにすることにより、支援モデルを評価・検証して、支援モデルを構築し、支援プログラムを評価・改良し、支援プログラムを開発する。

3. 研究の方法

- (1) デザイン：実践研究（実践を通しての看護職支援プログラムの開発）
- (2) 方法：①実践：支援モデルに基づく支援プログラムの実施
②データ収集：「実施内容逐語録」、「実施前後の質問紙調査」、「終了後のプログラム参加者を対象とした質的インタビュー調査」
③分析方法：上記のデータをもとに、プログラムの効果を量的・質的に分析/解釈し、プログラムの評価及び支援モデルの妥当性を検証する。その結果をふまえ、支援プログラムを開発する。
- (3) 倫理的配慮：支援プログラムおよび調査への参加は、個人の自由意思とした。研究にあたっては、代表者の所属する大学の研究倫理審査で承認を得てから実施した（承認番号 No.17-79）。

4. 研究成果

(1) 支援モデルの検討

アディクション問題にかかわる看護職者支援モデルの試案作成（2013年度～2015年度科研、基盤研究C、JP25463571）の結果を再考し、看護職者支援のモデル図を作成した（図1）。

アディクション問題にかかわる看護職者には、リフレクティブな看護実践が必要となる。「看護師がリフレクティブな看護実践をできるように支援することは、看護師のアディクションについての理解を深め、看護師の看護の質を高め、患者との関係を良好なものとする。そして、依存症者を特別な存在としてではなく、自分と同じ人間としてとらえるようになり、患者観が変化する。このようなプロセスは、看護師のエモーショナルリテラシーを高め、患者に対するネガテ

イブな感情が中立的な感情へと変化する感情的な支援となる。リフレクティブな看護実践を支援するには、①アディクションに関しての実体験に基づいた情報や知識の提供、②安心した思いや考えを語り合える場の提供が、必要と考えられた。

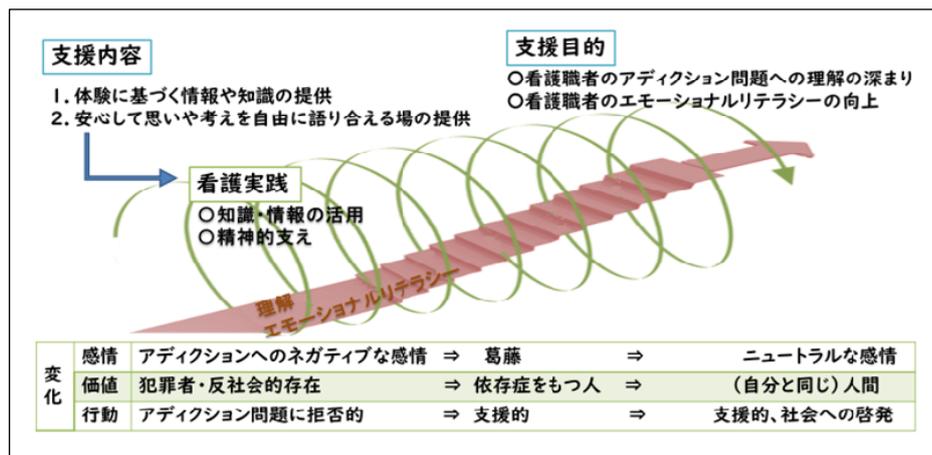


図1：アディクション問題にかかわる看護職者支援モデル

(2) アディクション問題にかかわる看護職者支援プログラムの作成

①プログラムの目的

アディクション問題に実際にかかわる体験をもつゲストスピーカーからの「体験に基づく情報や知識の提供」をもとに、参加者自身の思いや考えを安心して自由に語り合える場を提供することで、参加者のアディクションや関連する問題への理解を深め、またグループの中で自らのペースに応じ自らの感情と向き合う体験を通しエモーショナルリテラシーの向上を図る。

②プログラムの構成

1部：ゲストスピーカーから話題提供

アディクションをもつ人とのかかわりに関する実体験（当事者の体験談を含む）に基づいた情報や知識の提供

2部：サポートグループ

ゲストスピーカーを交え参加者同士での「意見交換」の場とする。批判や議論の場とはしない。思ったこと、感じたこと、想起したことなど、自由に話し合えるグループとする。話したい時に話し、話したくない時は他者の話をきき、時間と場を共有する。

③実施場所

双方向型のプログラムとなるように、お互いの顔が見えるように、1部も2部も、机なしで、椅子だけの円形となって着席できる場所が望ましい。

④参加者

対象者：アディクション問題への困難や疑問、関心のある看護職者
人数：20人程度まで

⑤時間

1部と2部とで、2時間程度が望ましい

(3) アディクション問題にかかわる看護職者支援プログラムの実際

①実施期間：2018年6月～2019年1月

②実施者（研究者）：寶田、多喜田、谷口

③実施回数：8回（1か月に1回）

④開催時間：14:00～16:00

⑤開催場所：大学の教室（多目的に使用できる部屋）

⑥参加者：[募集]研究への参加依頼として、開催地近隣のアルコール依存症治療を行っている精神科病院、精神科看護協会などに、チラシを配布し、参加希望者を募った。
[参加登録者]希望者が20名にて、参加登録者20名で開始した。

⑦回ごとのテーマおよびゲストスピーカー

- 第1回 アディクションと看護/看護師
- 第2回 アディクションと生活保護/ケースワーカー（生活保護担当）
- 第3回 摂食障害とクロスアディクション/複数のアディクションをもつ人
- 第4回 アディクションをもつ人が弁護士に依頼するとき/弁護士
- 第5回 薬物とアディクション/薬物依存症をもつ人
- 第6回 アディクションと家族/薬物依存症をもつ人の家族
- 第7回 アルコールとアディクション/アルコール依存症をもつ人
- 第8回 自傷とアディクション/自傷アディクションをもつ人

(4) アディクション問題にかかわる看護職者支援プログラムの評価

【目的1】プログラムの評価1

- ① 参加登録者 20名
- ② プログラム各回の参加者

回	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回
開催月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
参加者数	17	16	14	13	13	12	11	11
研究者数	3	3	3	3	3	3	3	3

- ③ 質問紙回収率
プログラム前：配布 20 回答 20 (回収率 100%)
プログラム後：配布 15 回答 14 (回収率 93.3%)
- ④ プログラム後の変化

プログラム後 N=14	理解の変化		とても深まった	深まった	どちらともいえない	深まらない	記入なし
		アルコール	4	8	1	0	1
		薬物	5	7	1	0	1
		ギャンブル	2	5	4	0	3
		自傷	4	6	3	0	1
	摂食障害	2	6	3	0	3	
	感情の変化		変化した	どちらともいえない	変化しない	記入なし	
		アルコール	10	1	2	1	
		薬物	9	3	1	1	
		ギャンブル	4	6	1	3	
		自傷	9	3	1	1	
	摂食障害	5	4	1	3		
	態度や行動の変化		変化した	どちらともいえない	変化しない	記入なし	
		アルコール	12	0	1	1	
		薬物	11	2	0	1	
		ギャンブル	5	6	0	3	
		自傷	12	1	0	1	
	摂食障害	7	5	0	2		
	エモーショナルリテラシーの変化		変化した	どちらともいえない	変化しない	記入なし	「変化しない」1人の自由記載内容は変化の記述
		11	2	1	0		
	プログラム満足度		とてもよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	記入なし
		9	5	0	0	0	
	ゲストスピーカーの話		とてもよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	記入なし
	11	3	0	0	0		
意見交換の場		とてもよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	記入なし	
	5	3	2	0	3		

⑤ 考察

今回の参加者のほとんどが、仕事上でアディクション問題とのかかわりがあり、苦しい感情体験を抱いた体験を有していた。本プログラムでは、エモーショナルリテラシーの変化を感じている者が 79%であり、アディクションに対する理解が深まり、苦しい感情の変化につながったといえる。また、実際に、アディクションをもつ人への態度や行動の変化も感じていた。本プログラムは、感情的サポートにつながり、実践にも活用できる可能性があると考えられる。

1部の評価に対し2部のサポートグループは、「どちらとも言えない」と「記入なし」で35%を占めた。これまでのサポートグループ研究の結果から、参加者(看護職者)は「自身の感じたことや考えたことを自由に話すことが容易でない」傾向があると思われ、今回も影響していると考えられる。今回は、ゲストスピーカーと研究者を含めると、21~15人の中グループであり、グループへの参加が初めての参加者にとっては、容易ではない点があったと考えられる。グループにおいては段階をふまえたプログラムの検討が必要と考えられる。

【目的2】プログラムの評価2

- ① データ収集方法：半構造化インタビュー
- ② インタビュー対象者：支援プログラム(計8回)に3回以上参加した看護職者16名
- ③ インタビュー参加者：上記対象者に、メールにてインタビュー参加への依頼を送信し、メールへの返信を得て、対面で研究についての説明を行い、同意が得られた人
- ④ 分析方法：インタビュー内容は同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成し、プログラムの効果に関連する語りについて、オープンコーディング、焦点を絞ったコーディングを繰り返し、浮かび上がってきたテーマ間の関係を吟味し、プログラムの効果についてのストーリーを描きだした。
- ⑤ インタビュー参加者 10名(男性1人 女性9人)
- ⑥ インタビューの時期：プログラム終了後 6か月が3人、7か月 5人、8か月 1人、
- ⑦ インタビュー時間の平均：53分(最短32分、最長76分)
- ⑧ 参加者が語った支援プログラム

1部：参加者にとって「新たな情報や知識を得る」場となっていた。それは、単に「情報や知識を得た」だけではなく、「心揺さぶられる」体験であり、「感謝」や「異和感と向き合うしんどさ」を伴う体験でもあった。自身の考え方や価値観への変化につながる体験でもあった。「今までの経験では多分いけなくなってきた、…略…、多分見えてくる角度とかその考え方とか看護観とかちょっと自分の中では、たてなおしをしないとイケなくなる（Gさん）」

2部：参加者にとっては、ゲストスピーカーや他の参加者との話から、共感を得る場でもあった。心のざわつきや苦痛、これまでのかかわりがこれでよかったという思いなど。また、安全に語れる安心感のある場であると語る人もいた。しかし、今回の参加者の多くは、言えなかったと、自分の思いを言葉にすることの難しさを語った。

⑨ 参加者が語ったプログラム参加後の変化

自身（援助者）の存在価値への気づき：依存症専門病棟等での勤務経験がある人たちは、参加前には、無力感があったと語った。自身の看護師としての「存在価値自体が怪しい」とも語られた。今回のプログラムを通して、これまで行ってきたことが認められた（当事者の語りから）、無意味ではないとも語られた。

価値観の変化：アディクションのケアにおいて重要視する考え方や捉え方の変化をほとんどの人が語った。「回り道だけど淡々と」「良い意味でも悪い意味でも、期待したらだめ」「責める資格はない、ただ（その時）ベストなことをやればよい」「問題は私の中にある（他者を変えようとする自分）」など。また、自分の中に見えない輪がひろがり（共同体的感覚）、それがお守りのイメージとなっているとも語られた。

態度の変化とそれに伴う周囲の変化：価値観の変化は、行動の変化にもつながっていた。Dさんは、変えようとするのではなく、患者と話すようになったと言う。プログラムで聴いたゲストスピーカーの話を患者にすると、患者との関係性が変わったという。そういったDさんの姿をみた上司から、良い評価を得たと語った。そういった変化で、「心の余裕が生まれた」とも語った。また、「疲労はするけど、以前の疲労の仕方と違い、看護が楽になるとの語りもあった。そして、「以前は、ちょっと（患者より）上にみていたかな」とも語られた。

⑩ 考察

今回の支援プログラムは、「感情」「価値観」「行動」といった側面への変化をもたらし、その変化は、ケアの中で生かすことができたと考える。「感情」や「行動」の変化には、「価値観」の変化の影響が大きいと考えた。また、今回のプログラムでの支援内容は、実際に看護実践の場で、知識・情報を活用するものとなり、プログラムで得た精神的な変化は、お守りのような精神的支えともなっていた。そして、参加者各々のアディクション問題への理解は深まったと考える。また、感情的な安定にもつながり、その背景にはエモーショナルリテラシーの向上も考えられた。

以上のことから、今回の支援プログラムは、支援モデルにもとづく効果をもたらしたと考える。また、感情や行動の変化には、価値観の変化が関連していると考えられたが、価値観の変化や感情や行動の変化との関連については、今回の発表では、具体的に上げることができていない。しかし、分析からは、参加者それぞれのライフストーリーとの関係が想定された。今後、価値の変化とアディクション看護について、さらに詳細な検討が必要と考える。

【目的3】支援モデル・プログラムの総合的評価

本プログラムでは、目標としていた「アディクションや関連する問題への理解の深まり」「エモーショナルリテラシーの向上」に関しての効果は確認された。しかし、グループが安全で安心できるグループであったかという点は、疑問である。

支援プログラム終了後の参加者へのインタビュー調査では、「グループで話すこと自体が苦手」、「グループの人数が多く、また多くのメンバーが初めて出会った者同士であったため、安心感を得ることが困難」との語りもあった。そういった困難の背景には、自分自身やアディクション、ケア、など様々なことに対する「価値観の揺れ」があった。そして、「知識を得て理解はしても、自身の価値観に関連する変化を困難」とする語りが少なくなかった。アディクションをもつ人も同じ「人間」という点は、知識として理解はできるが、受入れる困難さが浮かび上がってきた。依存症に対する知的な理解の変化と、依存症者と関わるといった態度・行動の変化との間には、「価値観の揺れ」が存在すると考えられた。今回の支援プログラムを通して、「価値観の揺れ」をこえ、「楽になった」と語る参加者もいた。「価値観の揺れ」をこえ、学ぶには何が重要なのだろうか。今回企画した研修会タイプの支援プログラムでは、知識や感情の変化による理解の深まりだけでは、アディクション問題とのかかわりに何らかの困難を抱えている看護職者への支援としては不十分であった。看護職者が薬物依存症者との治療的な患者—看護師関係を構築するにあたり、関係性の中で生じてくる「価値観の揺れ」とどう向き合うか、そして向き合うプロセスをどう支えるかについて、今後検討が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 寶田 穂、多喜田恵子、谷口俊恵、倉田めば
2. 発表標題 アディクション問題にかかわる看護職者支援プログラム ~アディクションを理解し、看護に活かす~
3. 学会等名 第32回日本精神保健看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寶田 穂
2. 発表標題 アディクション問題にかかわる看護職者支援プログラムの評価：実施後の質的インタビューの結果から
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Minori TAKARADA, Nahoko NISHIZAWA, Satome TAKAMA, Keiko TAKITA, Toshie TANIGUCHI
2. 発表標題 The educational program for nurses working in the field of addiction: Focus on emotional support
3. 学会等名 International Council of Nursing Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寶田穂、多喜田 恵子、谷口俊恵
2. 発表標題 アディクション問題にかかわる看護職者支援プログラムの評 価：実施前後のアンケート結果から
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 賣田穂、高間さとみ、多喜田恵子
2. 発表標題 アディクション問題にかかわる看護師のためのサポートグループの意義 ~計50回のグループの実施を通して~
3. 学会等名 第28回日本精神保健看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Minori TAKARADA, Nahoko NISHIZAWA, Satomi TAKAMA, Keiko TAKITA, ToshieTANIGUCHI
2. 発表標題 The educational program for nurses working in the field of addiction: Focus on emotional support
3. 学会等名 ICN Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 賣田穂、西澤奈穂子、多喜田恵子、高間さとみ、谷口俊恵
2. 発表標題 The Model of Emotional Support for Nursing Professionals in Substance Use Treatment: From the Results of the Interview Studies on Nurses in the USA and Japan
3. 学会等名 44th Annual Conference of Transcultural Nursing Society (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	多喜田 恵子 (TAKITA Keiko) (50226966)	愛知医科大学・看護学部・教授 (33920)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高間 さとみ (TAKAMA Satomi) (90588807)	鳥取大学・医学部・講師 (15101)	
研究分担者	谷口 俊恵 (TANIGUCHI Toshie) (20757455)	梅花女子大学・看護学部・講師 (34517)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関